



続論点を探る 3

問われ続ける

システム現場の大命題

田原文夫

無残なシステム

今の問題は、大型機で作られたシステムの維持管理だろう。新しいシステムとのつなぎだろう。廃棄も出来ず、相変わらず維持し続けている現状を、どう理解しているのか、機会があれば聞きたいものだ。

旧来古式の維持管理が必要な大型機ベースのシステムが、あちこちに鎮座ましましている。廃棄することも簡単にはいかない。そういうシステムだらけだ。

夢見もいいが、責任の所在不明のシステムは困る。

その場しのぎの対応は、予想出来ない結果を招くものである。大規模なコンピュータをベースにしたシステム構築には、そのクライが多々認められるところである。

昨今の事象でいうと、今回のコロナ禍における政府の対応策である「一人 10 万円の給付金」がある。実際の配布作業の遅れは酷かった。衆知の通りである、

その酷さ加減は、ことのほか酷かったと敢えて指摘しておきたい。筆者の目には、決められた日までの給付実行は、もとより無理だったと写る。理由はいくつかあるが関係者全員が意味が分かっていない。

コンピュータがあるから大丈夫と、あるヒトは言った。マイナンバーカードを使えば簡単である、と言うヒトがいた。だがしかし、何が、どう大丈夫なのか、どう簡単なのか、誰も言わなかったし、追求もされなかった。だから、何も分からないままに時間ばかりが経った。案の定、給付までの時間は長くかかった。

筆者の見るところ、実は、「給付ができるシステムがなかった」のだ。給付実行アプリケーションがなかったのだ。関係者は、在りもしなシステムを、あたかも存在しているかのように妄想をしていたのだ。

実は、ことの本質が分かっているヒトはいたとは思いますが、どうなのだろうか。何故

表に出てこなかったのだろうか。

仕事の基礎は、ヒト、モノ、カネだ。国の経営も、企業の経営も、システムも基幹は同じだ。これを通常、経営の三原則と言う。四番目にシステムを加えることもあるが、何か胡散臭い。これが曲者で、状況を複雑にする。

三原則は、経営の基本である。経営の基幹でもある。だが、この基幹をサポートするシステムがない。サポートしようとしているソフトも見えてこない。

システム部門員が基幹システムと言う場合、企業の基幹でも、システムの基幹でもない。システム部の自分の担当部分を基幹だと言っている場合がある。

どのヒトと、どのモノと、いくらのカネをかけ、どう組み合わせるかが、アプリだが、この状態で、システムはある、アプリはある、と平気で言う。

国も、企業も同じ、という意味は、そういうことである。元を正さず、表面だけを正す。根本的理解が欠けている。

ヒト、モノ、カネのシステムをどう作るのかが課題だ。ヒトシステム、モノシステム、カネシステム、である。

言うのは簡単だが、どう作るのか。もちろん筆者一人では手に負えない。そこで、ヒトシステムを例に取り上げる。

国の問題

納税の季節が来る。することは、確定申告である。申告書には、課税所得が四百万円以下なら、確定申告の要なし、とある。

これは納税の簡素化にはなるが、ヒトデータにはならない。納税義務を無視し、情報収集を放棄している。結果として、ヒトデータベースの基礎を放棄している。これでシステムがあり、アプリがあるとはナンセンスだ。

折角の情報を欠き、無してしまふ。無視しても代替がない。気が付かないし、それでいいと納得している。

だから、低額所得者の情報がない。したがって、四百万円以下の所得者を対象に、何かの施策が必要だとしても、何も出来ない。

それとも、端から低所得者対象の対策は考えない、低所得者は相手にしていないということなのだろうか。

コンピュータシステム云々以前に、国が国民のための政策施策をするための基本／基礎データの収集／蓄積に熱心でないことが、国家として大きな問題である。

これはちょうど、企業における基本／基礎データの活用を軽視してきているのと同様である。

物事を系統的に見ないと、こうなる。これでは、適切かつ真つ当な政策／施策／対策は、いつまでたっても出来やしない。

民の問題

従業員の給与計算を経費と考えれば、安価なところに外注する。この態度にも同じことが窺える。判断間違いとは言わないが、社員を顧客と考えていない。つまり、自社が保有する重要な情報だと考えていない。安易な外注は、社外への情報流出と同じである。という発想をしると言いたいのだが、言うだけ無駄か。

代理店と当社製品の扱い品目との関係である。つまり、何の代理店なのか、である。

どの業務の代理なのか。両者の関係をリストしてみた。調べて驚いた。どういう関係の代理店か、当然のここのように、誰もチェックしていない。もちろん、問題ありだという認識はまるでない。

この問題は難しい。見方によっては、粗探しである。実は、こういうチェックはコンピュータを使えば簡単なことだ。だが、そもそも、情報というものに興味はない、すなわち、仕事を知らないということで、見過ごしてしまっているだ。

厄介な個性

コンピュータに情報があるのに使おうとせず、自前で収集しようとしていることに対して、何故かと思った。ヒトと情報との関係である。

ヒトは、他人が集めた情報は信用しない。だから、自分で集めようとする。それを自覚しているヒトも少ない。ただ、無意識に知覚しているヒトはいる。

今考えても、MIS（経営情報システム）は酷いものだった、と思う。もうひとつの酷いと思ったのは、台帳不要論だった。

これは、データベース不要論につながるが、気付いていない。無意識の善意が最高にひどい。

コンピュータの素人に、ないものねだりをして意味はない。また、意味がないどころか、最終的にMISは出来もしなかった。

同じ時期、システム部に、ディスクの有用性は、周知されていたのだろうか、と今でも疑問に思うことがある。

パソコン再考

パソコンの出現は、従前の情報システムの問題点を一変させた。汎用大型コンピュータベースのシステム作りを根底から揺さぶった。

システム屋（情報システム部門）は、プロセスを重視し、素人は、結果を重視するという根源的相違点を浮き彫りにさせた。

ちょっと乱暴な言い方だが、素人は、結果が得られれば、プロセスは多少何でもいいのだ。現場を離れて暫く経つ筆者には、判断が難しいが、マスコミから透けて見える状況から判断するに、事態は改善していない。

仕事における業務変更は、システムには求めるが、人間には求めない。何故か。

ディスク装置は、従前のテープ装置の代わりではない。テープ装置が分かっている人は、無理を承知で、ランダムアクセスをシリアルアクセスでカバーしていた。

ディスクで何が出来るのか、の経験もない。シリアルなデータしか扱えないテープは、給与計算、売上計算、売掛金計算などには有効だが、可能でないものも沢山あるのだ。

そういう状況の中で、経験もないランダムアクセスの効用など、問うまでもない。こんな状態で、パソコンが出現し、職場を席卷していった。

コンピュータにのみ興味があるヒトと、コンピュータはよく分からないヒトとの出会いが起こった。勝負は、時間がつけることになる。

ヒトについてのデータは、多くのヒトが、あの手この手で集めているのに、集めていないふりをする。ふりどころか、何を集めているのか、本当に分かっているのかかもしれない。

国も、企業も、ヒトの情報なしには何も出来ないのに、ある人は出来るかのように言うのは何故だろうか。多分、事の本質を知らないからだろう。

「赤ちゃん本舗」という会社がある。この会社は、何処で、何時、何人の赤ちゃんが生まれたかを知らないでは、仕事にならない。

日本は人口減という。誰が調べているのか。年に 90 万人弱の人が生まれ、そして死ぬ。去年は、死亡 130 万人、誕生 80 万人である。

カウントのベースは、個人情報そのものである。納税で納税者を知り、誕生／死亡で人の生き死にを知る。しかし、トータルは分からない。それで平気だとすれば、不思議な発想である。

これらの数は、業務システムの基本である。年間の誕生数、死亡数を知るのは、アプリである。この区別もなく、区別をしようとしめない。

そして、業務システム、アプリを語る。つまり、業務システム、アプリの意味を知らないということだ。

そんな関係者に、情報を使って、何かをさせると、おかしいことになる。それは、悪意を持つアプリであると言える。こういう事情から、業務システムもアプリもないのではないかと感じてしまう。

ヒトに関する情報は、誕生数、死亡数だけでなく、アップデートでも大切である。「赤ちゃん情報」が必要な企業はいくらでもある。幼児数であり、園児数である。学童数は、生徒数は、学生数は、と続く。数としたのは、すべて情報であるからだ。

(FumioTAHARA)